

【原 著】

性的マイノリティに関する授業が性的マイノリティへの
知識や受容感に及ぼす影響
性的マイノリティに関する授業の前後で

野田 夕月奈 山田 剛史 大守 伊織

The Effects of Taking a Class on Knowledge about Sexual and Gender Minorities and Homophobia

NODA Yukina, YAMADA Tsuyoshi, OHMORI Iori

2021

岡山大学教師教育開発センター紀要 第11号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.11, March 2021

原 著

性的マイノリティに関する授業が性的マイノリティへの知識や受容感に及ぼす影響

性的マイノリティに関する授業の前後で

野田 夕月奈※1 山田 剛史※2 大守 伊織※3

本研究の目的は、性的マイノリティへの関心やレディネスが備わっていない場合であっても授業を受けることにより性的マイノリティへの受容感や知識及び自身の知識に対する自信が変化するかどうかを明らかにすることである。方法は、教員志望の学生を対象に 100 分の授業を実施した。調査項目は、性的マイノリティに関する知識量および正答確信度と同性愛者受容感尺度であった。結果は、授業を受けることで、有意に性的マイノリティに関する知識量が増え、同性愛者への受容感が高まることが分かった。しかし、受容感に対する授業の効果量は僅かであった。正答確信度に関しては、授業前は、誤った知識をもっている人ほど自分の知識に自信をもっていたが、授業後は、正しい知識を持っている人ほど自分の知識に自信を持っているという正の相関へ転じた。以上の結果から、性的マイノリティに対する受容感を高める効果的な授業の方法を模索していく必要があると考えられた。

キーワード：性的マイノリティ，性の多様性，教育

※1 岡山大学大学院教育学研究科大学院生

※2 横浜市立大学都市社会文化研究科

※3 岡山大学大学院教育学研究科

I 問題と目的

近年、学校現場における性的マイノリティ当事者の児童生徒への対応について関心が高まっている。性的マイノリティとは「性自認が生物学的性と一致しており、かつ性的指向が異性である」という多数派の性のあり方（セクシュアリティ）にあてあまらない人たちの総称である（戸塚，2018）。また、性的マイノリティを表す用語として、「LGBT」が用いられることもある。L は女性同性愛者（レズビアン）、G は男性同性愛者（ゲイ）、B は両性愛者（バイセクシャル）、そして T は生物学的性と性自認が一致していない性別越境者（トランスジェンダー）を意味する（戸塚，2018）。現在、制服の選択制や呼称の統一など様々な対応が行われているが、学校現場における性的マイノリティ当事者児童・生徒への対応は問題が多い。問題点の 1 つとして、教員の性的マイノリティに関する知識不足と対応力への自信のなさが挙げられる。日高(2015)は教員 5979 人を対象に行った調査において、教員の 3 割は「同性愛は病気である」や「性的指向は自分で選べるものである」という誤った知識をもっていることを明らかに

した。井出・松尾・鎌塚・山元・玉井・細川(2018)は、静岡県 of 公立高校の養護教諭に対して性的マイノリティ当事者児童・生徒が相談に来た際、適切に対応する自信があるかについて調査を行ったところ、半数近くの教員が「どちらかといえば自信がない」「自信がない」と回答したことを明らかにしている。この問題に対応するため吉岡・坂谷(2017)は、「教員になる前の教員養成課程段階において、LGBT に関する正しい知識を身に付けておく必要があるだろう」と述べている。

性的マイノリティに関する授業実践の効果については、いくつかの報告がある。佐々木(2016)は、ゲイ当事者男性による講演会の前後でゲイに対するイメージの変化について調査を実施し、講演会を受けることによって、ゲイに対するネガティブなイメージが払拭され、より身近に感じられるようになることを指摘している。しかし、講演会への参加は参加者の自由意思であるため、参加者はもともと性的マイノリティに関心があり、受容しようとするレディネスが備わっていた可能性がある。性的マイノリティに関心がない場合や、性的マイノリティに対してネガティブなイメージをもっている場合であっても、講演会を受けることで受容的な態度へと変化するかは明らかになっていない。また橋弥・平井・梶村(2016)は、セックスとセクシュアリティ、性的マイノリティについての授業を行い、授業前後で性的マイノリティに対する知識がどのように変化するかを検討しているものの、感想文の分析であったため定量化されておらず、真に知識量が増加したのかについては検討の余地がある。

また、Taylor, Condry, & Cahil(2017)は、医療系の大学生に対し 60 分の講義と 90 分のロールプレイからなる授業(計 150 分)を実施し、授業効果を検討した。講義では性的マイノリティの法律や健康に関する不平等や差別と健康の関連性を取り上げ、ロールプレイでは性同一性障害のクライアントとの性転換手術に関する相談場面を設定した。実践の結果、授業を受講することにより、LGBT のクライアントへ対応する自信が高まることを明らかにした。ロールプレイを取り入れた授業を行うことで、学校現場における性的マイノリティ当事者への対応の問題点として挙げられている「教員の対応力のなさ」を解決するための糸口をつかむことができると考えられる。しかし、Taylor et al. (2017)が実践した授業は 150 分間、先述した橋弥他(2016)が行った授業は 180 分間にわたるものである。教員養成課程での時間・単位数には限りがあり、取り上げるべき問題が山積している(白石, 2016)現在において、性的マイノリティに関する授業実践に長時間を割り当てることはカリキュラム上困難である場合が多い。教員養成の時間が不足していることを鑑み、短時間かつ効果的な授業実践を行う必要がある。

そこで本研究では、教員養成課程と養護教諭養成課程の学生を対象に、性的マイノリティに関する 100 分間(1 回)の授業を実施することで、受講者の知識量や受容感がどのように変化するか明らかにすることを目的とする。本研究における仮説は次の 2 つである。(1)性的マイノリティに関する授業を受けることで、受講者の性的マイノリティに関する知識量は増える。(2)性的マイノ

リティに関する授業を受けることで、受講者の性的マイノリティに対する受容感が高まる。

II 方法

1 調査対象者

A 大学教育学部で 1 学期 1.2 限に開講されている「教育心理学概説」を履修している A 大学教育学部学校教育教員養成課程の学生 116 名，養護教諭養成課程の学生 40 名の合計 156 名であった。

2 調査方法

(1) 授業実践

A 大学教育学部で 1 学期 1.2 限に開講されている「教育心理学概説」において 2019 年に性的マイノリティに関する授業を行った。授業の内容は表 1.1 の通りである。

表 1.1 授業の内容

1. 前回の授業の振り返り (10 分)
2. 導入：グループワーク「ワードウルフ」 (15 分)
3. 講義：セクション 1「人間の性とは何か」 (25 分)
セクション 2「LGBT とは何か」 (30 分)
セクション 3「偏見・差別とどう向き合うか」 (25 分)
4. まとめ (5 分)
5. 授業後アンケート (10 分)

導入以降の具体的な活動内容とその教育目的を表 1.2 から表 1.5 に示した。なお，性的マイノリティに関する授業内容は著者と養護教育を専攻する大学院生が協同して作成した。

表 1.2 グループワーク「ワードウルフ」の教育目的と活動内容

教育目的：性的マイノリティの不可視性を体験する。

具体的な活動内容

- (1) 6人で1つのグループをつくる。
 - (2) 1人1枚紙を配る。紙の内容は以下の図 1 の通りである。
 - (3) 「野菜」に関する話題でトークをする(約3分)。この時以下のルールに従う。
 - ・自分の紙に書いてある野菜そのものの名前は決して口に出さない。
 - ・紙に書いてある指示には従う。
 - ・配られた紙を他人と交換しない。
 - ・他人の紙を覗かない，他人に自分の紙を見せない。
 - (4) トークが終わったら，グループの中に他の人とは違う野菜が書かれた紙を持っている人がいたことを告げる。他の人とは違う紙を持っている人の存在に気付いたか，それは誰なのかを問いかけ，自分や他の人とは違う存在に気付けるようにする。
-

<p>あなたは、じゃがいも⁴</p> <p>について話してください⁴</p> <p>“じゃがいも”には、いろんな調理法があります。⁴</p> <p>切る、焼く、揚げる、蒸す、煮る…⁴</p> <p>あらゆる調理法を用いることができるので、⁴</p> <p>“じゃがいも”はさまざまな料理に使われています。⁴</p> <p>さらに、マヨネーズからケチャップ、バターなど、⁴</p> <p>合う調味料もいろいろあります。⁴</p> <p>こうしてみると、じゃがいもって、⁴</p> <p>いろんな料理に変身できる、万能の野菜ですね。⁴</p>	<p>あなたは、じゃがいも⁴</p> <p>について話してください⁴</p> <p>ある企業は、毎年「子どもが好きな野菜ランキング」⁴</p> <p>を作成しています。⁴</p> <p>“じゃがいも”は、5年連続で第2位にランクイン⁴</p> <p>するほど、野菜として不動の人気があるそうです。⁴</p> <p>“じゃがいも”って、いろんな料理に使われるし、⁴</p> <p>子どもの頃からいろんな思い出がつまってそうですね。⁴</p> <p>ちなみに第1位は“トマト”で、⁴</p> <p>7年連続でトップなんだとか。⁴</p>
<p>あなたは、じゃがいも⁴</p> <p>について話してください⁴</p> <p>あなたが“じゃがいも”を使った食べ物の中で、⁴</p> <p>一番好きな食べ物は何か？⁴</p> <p>フライドポテト、ポテトチップス、じゃがバター、⁴</p> <p>肉じゃが、ポテトサラダ、カレー、炒め物やスープの⁴</p> <p>具材にも…⁴</p> <p>こうしてみると、じゃがいもって、⁴</p> <p>いろんな食べ物に変身できる、万能の野菜ですよ。⁴</p>	<p>あなたは、じゃがいも⁴</p> <p>について話してください⁴</p> <p>☆依頼☆⁴</p> <p>できるだけグループで一番初めにじゃがいもを用い⁴</p> <p>た料理についてお話をしてください。その時、下記の⁴</p> <p>①～③の発言を自然なかたちで話題提供をお願いします。⁴</p> <p>順番や言い方などは変えても構いません。⁴</p> <p>①カレー、肉じゃが（他のじゃがいも料理でもOK）⁴</p> <p>とか何の料理にも使えて便利だよ。⁴</p> <p>②冷蔵庫に入れても腐らなくて便利だよ。⁴</p> <p>③子どもに人気な料理によく使われてるよ。⁴</p>
<p>あなたは、じゃがいも⁴</p> <p>について話してください⁴</p> <p>☆依頼☆⁴</p> <p>あなたは、ピーマンについての悪口を会話の中で⁴</p> <p><u>言ってください</u>。できるだけ、早めの段階（2～3番⁴</p> <p>目の発言くらいに）で悪口を言ってください。しつこ⁴</p> <p>く、複数回言ってもいいです。⁴</p> <p>例「（他のメンバー）何の料理にも使えて便利だよ」⁴</p> <p>→『（あなた）ピーマンって調理しにくい』⁴</p> <p>「（他のメンバー）子どもに人気な料理に使われる。」⁴</p> <p>→『（あなた）ピーマンは、子どもに嫌われてるよね』⁴</p> <p>※セリフはあくまでも見本です。⁴</p> <p>よかったら、『え、皆も同じでしょ？』など、⁴</p> <p>他のメンバーの意見も聞いてみてください。⁴</p>	<p>あなたは、ピーマン⁴</p> <p>について話してください⁴</p> <p>☆依頼☆⁴</p> <p>周りの皆に指定された野菜は“ピーマン”では⁴</p> <p>ありません。自分が指定された野菜が<u>周りの人</u>に⁴</p> <p><u>わからないよう</u>、周りに合わせてうまく会話に⁴</p> <p>参加しましょう⁴</p> <p>周りの人の“野菜”を推測するとよいかもしれません⁴</p> <p>そして、・必要最低限のことしか話さない⁴</p> <p>・皆の“野菜”について自分も喋る… など⁴</p> <p>自分が指定された“野菜”を隠しながら⁴</p> <p>会話に参加する方法は、いろいろあります。⁴</p> <p>いろいろと試してみてください。⁴</p>

図1 グループワーク「ワードウルフ」で配られた紙の内容

表 1.3 講義「人間の性とは何か」の教育目的と活動内容

教育目的：人間の 4 つの性とセクシュアリティを理解する。

具体的な活動内容

(1)人間の性には、からだの性、こころの性、好きになる性、そして社会的な性(ジェンダー)の 4 つの性があることを学ぶ。それぞれ以下の要点に沿って講義をした。

からだの性：からだの性は生殖器や遺伝子、ホルモンによって決まる。
また、男性と女性に二分化できるものではなく、インターセックスと呼ばれる人たちがいる。

こころの性：こころの性とは自分が認識している性別のことである。
男性か女性に二分化できるものではない。どちらでもあるまたはどちらでもないと認識している人もいる。

性的指向：性的指向は自分のこころの性と好きになる性の組み合わせによって決まる。

異性が好き、同性が好き、異性と同性のどちらも好き、好きにならないなど様々なあり方がある。

ジェンダー：人間は自分の性別を行動や言動などのいたるところに反映させている。つまり自分の性別を無意識のうちに表現している。

具体例として、髪型や口調、持ち物や服装などがあげられる。

(2)4 つの性の組み合わせをセクシュアリティといい、セクシュアリティは人それぞれであることを理解する。

表 1.4 講義「LGBT とは何か」の教育目的と活動内容

教育目的：LGBT をはじめとした性的マイノリティについて理解する。

具体的な活動内容

(1)LGBTQ の説明を通して、それぞれどのようなセクシュアリティの人たちか理解する。

(2)性的指向について取り上げ、「こころの性(性自認)と好きになる性の組み合わせによって決まること」を学ぶ。また性的指向の不確かさについて、「一度同性を好きになったからといって同性愛者であるとは限らない」ことを理解する。

(3)性別違和について取り上げ、「性別違和を感じている人が必ずしも性別適合手術を望んでいるわけではない」ことを理解する。

表 1.5 講義「偏見・差別とどう向き合うか」の教育目的と活動内容

教育目的：差別や偏見のメカニズムについて学び、これからの自分の行動や学びを考える。

具体的な活動内容

- (1) 読売テレビの関西ローカルニュース番組「かんさい情報ネット ten.」の 2019 年 5 月 10 日放送回を視聴し、気になったことを周りの人と話し合う。放送内容は、男性か女性か見た目で判断しにくい一般の方に対し、執拗に男性か女性か問い続けた後、胸を触ったり、保険証を見せるよう強要したりするものであった。
- (2) そのことについてよく知らない状態で、偏見に満ちた言動を見聞きしたりすると、自分の中に偏見が生まれ根付いてしまうという偏見形成のメカニズムを学ぶ。
- (3) (2)に基づいて性的マイノリティに対する偏見がどのように形成されるのかについて学ぶ。異性愛のみが普通だと学び、性別で悩む人の存在を知らない状態で、見慣れない同性愛を変な目で見たり避けたりする周囲の行動や、「おねえ・おかま」とおもしろおかしく揶揄する言動を読み取ることで、偏見が形成されてしまうことを理解する。
- (4) 差別や偏見をしないためには、そのことについて信頼できる情報をもとにまず自分なりに調べ、知ること、差別や偏見にさらされている人たちの状況を想像することが重要であることを学ぶ。
- (5) (1) で見た放送の続きを視聴する。内容は(1)の VTR に対して、コメンテーターが「個人のセクシャリティに関してそういうアプローチをする(執拗に開示を強要する)こと自体が人権感覚、人権意識にもとる」と強く批判するものであった。
- (6) (5) を視聴し、誰かが不当な扱いを受ける場面に遭遇した時、自分はどういう行動をとればよいのか、と問いかけこれからの自分の行動を考えられるようにする。

(2) 質問紙調査

授業参加による教育学部の学生の性的マイノリティに対する受容感、知識量の変化を捉えるため、授業前後で質問紙調査を実施した。事前調査は 5 月 29 日に実施し、事後調査は 6 月 5 日の性的マイノリティに関する授業終了後に実施した。質問紙調査は Google フォーム上で行った。事前調査の質問紙内容は、(1)フェイスシート(イニシャルと誕生日からなるニックネーム)、(2)性的マイノリティに関する知識を問う問題 19 問(L, G, B, T, Q それぞれが表す単語とその意味(計 10 問)、性的マイノリティに関する正誤問題(計 9 問))、(3)それぞれの問題に対する正答確信度(「自信がある」～「自信がない」の 4 件法)、(4)同性愛者受容感尺度 21 項目(「そう思う」～「そう思わない」の 4 件法)。(1)のイニシャルと誕生日からなるニックネームは事前調査と事後調査のデー

タを紐付け、授業前後の変化を検討するため自由意思に基づき記載を求めた。

性的マイノリティに関する知識量の測定は、薬師・笹原・古堂・小川（2014）の 6 項目と著者が独自に作成した 3 項目の計 9 項目からなる正誤問題で行った。性的マイノリティに関する知識を問う項目を以下の表 2.1 に示した。著者が自作した問題は「同性愛は治療することが可能である」「一度でも同性を好きになれば同性愛者である」「A さんはからだの性は男性で、こころの性は女性である。また A さんは男性が好きである。このとき A さんはゲイである」の 3 問である。また、事後調査の質問紙内容は事前調査と同一のものであり、(2) 性的マイノリティに関する知識を問う問題 19 問のうち、性的マイノリティに関する正誤問題(計 9 問)の順番を入れ替えた。

表 2.1 性的マイノリティに関する正誤問題

問題	正答
同性愛やからだとこころの性の不一致は思春期に起こる一過性のものなので時間が経てば治る	×
からだの性とこころの性が一致しない人は全員、性別適合手術を希望している	×
性的マイノリティの人はそうでない人より自殺未遂のリスクが高い	○
同性愛者は死刑とする国がある	○
ゲイとはテレビに出演しているような「オネエ」のことである	×
MtF とはからだの性が男性でこころの性が女性のひとのことを示す	○
同性愛は治療することが可能である	×
一度でも同性を好きになれば同性愛者である	×
A さんはからだの性は男性で、こころの性は女性である。また A さんは男性が好きである。このとき A さんはゲイである	×

同性愛者受容感尺度については、三上・井谷(2018)の性的マイノリティに対する意識項目、和田(1996)の同性の友人からカミング・アウトされたときの態度項目、宮澤・福富(2008)のゲイ(レズビアン)に対する意識尺度を一部引用し、21 項目からなる質問紙を作成した。同性愛受容感尺度項目を以下の表 2.2 に示した。

表 2.2 同性愛者受容感尺度項目

問題
1. 同性の人から言い寄られたら、いやな気がする
2. 同性から「同性愛者である」とカミングアウトされたとき、「気持ち悪い」と感じる
3. 同性から「同性愛者である」とカミングアウトされたとき、「理解できない」と感じる
4. 同性から「同性愛者である」とカミングアウトされたとき、襲われるのではないかと不安だ
5. 同性から「同性愛者である」とカミングアウトされたとき、「信頼してくれてうれしい」と感じる
6. 同性から「同性愛者である」とカミングアウトされたとき、「より親密になりたい」と思う
7. 同性の友人が同性愛者であるといやな気がする
8. 異性の友人が同性愛者であるといやな気がする
9. 家族に同性愛者がいるといやな気がする
10. 将来、教師になったとして受け持つ児童が同性愛者であるといやな気がする
11. 同性愛者の社会的な立場がもっと認められるべきだ
12. 同性愛者を社会から隔離した方が当人のためだと思う
13. 同性愛者は社会に悪影響を与える存在だ
14. ゲイと友達になれる
15. ゲイは気持ち悪い
16. 男性同士の結婚も認められるべきだ
17. ゲイをつい特別視してしまう
18. レズビアンと友達になれる
19. レズビアンは気持ち悪い
20. 女性同士の結婚も認められるべきだ
21. レズビアンをつい特別視してしまう

なお、性的マイノリティに関する正誤問題及び同性愛者受容感尺度項目は著者と養護教育を専攻する大学院生が協同して作成した。

(3) 分析方法

本研究における統計解析には、HAD version16.101(清水, 2016)を用いた。性的マイノリティに関する知識量及び受容感の変化を検討するため、事前知識得点(事前同性愛者受容感尺度得点)と事後知識得点(事後同性愛者受容感尺度得点)

点)について対応のある t 検定を行った。また性的マイノリティに関する知識と知識に対する自信の関連を検討するため、各問の正誤と正答確信度についてポリコリック相関係数の算出を行った。

(4) 倫理的配慮

アンケートへの協力は自由意思であること、回答は統計的に処理されるため個人が特定されることはないこと、そして本調査への回答が授業の成績に影響を与えることはないことを口頭で説明した上で、同意を得たものについて分析対象とした。

Ⅲ 結果

1 分析対象者

事前調査への回答者は 132 名であった。そのうち欠損値を含む 1 名の回答を除き、分析に使用したのは 131 名である。事後調査への回答者は 139 名であった。また、事前調査、事後調査において変化の比較が可能であったのは 97 名であった。

2 性的マイノリティに関する知識の変化

授業の効果を検討するため、事前調査と事後調査で対応が取れた 97 人を対象に事前調査での知識得点と事後調査での知識得点について対応のある t 検定を行った結果、有意な差がみられた ($t(96)=-8.717$, $p=.000$, $d=-0.911$)。効果量の大きさから、知識得点の変化について、授業の効果は大きいと解釈した。

3 性的マイノリティに関する知識と知識に対する自信の関連とその変化

問題の正誤と知識への自信の関連を見るため、事前調査に回答し欠損値を含まなかった 131 名のデータを対象に各問題の正誤と正答確信度についてポリコリック相関係数の算出を行った。算出の結果、「同性愛者は死刑とする国がある」($r_{po}=-.409$, $p=.000$), 「ゲイとはテレビに出演しているような「オネエ」のことである」($r_{po}=-.339$, $p<.01$), 「MtF とはからだの性が男性でこころの性が女性のひとのことを示す」($r_{po}=-.432$, $p<.01$), 「同性愛は治療することが可能である」($r_{po}=-.284$, $p<.05$) の正誤と正答確信度の間に弱い負の相関がみられた。

また事後調査に回答した 139 人を対象に各問題の正誤と正答確信度についてポリコリック相関係数の算出を行った。算出の結果、「からだの性とこころの性が一致しない人は全員、性別適合手術を希望している」という問題以外に負の相関を示す問題はなかった。また「同性愛やからだとこころの性の不一致は思春期に起こる一過性のものなので時間が経てば治る」($r_{po}=.569$, $p<.01$), 「ゲイとはテレビに出演しているような「オネエ」のことである」($r_{po}=.257$, $p<.05$), 「MtF とはからだの性が男性でこころの性が女性のひとのことを示す」($r_{po}=.759$, $p=.000$), 「同性愛は治療することが可能である」($r_{po}=.754$, $p=.000$),

「一度でも同性を好きになれば同性愛者である」($r_{po}=.493$, $p=.000$) の正誤と正答確信度の間に正の相関がみられた。

4 性的マイノリティに対する受容感の変化

授業の効果を検討するため、事前調査と事後調査で対応が取れた 97 人を対象に事前調査での同性愛者受容感尺度得点と事後調査での同性愛者受容感尺度得点について対応のある t 検定を行った結果、有意な差がみられた($t(95)=-3.205$, $p<.01$, $d=-0.199$)。効果量の大きさから、同性愛者受容感尺度得点の変化について、授業の効果はあまり大きくないと解釈した。

表 3.1 に事前知識得点と事後知識得点、事前同性愛者受容感尺度と事後同性愛者受容感尺度得点の平均と標準偏差及び対応のある t 検定の結果を示す。

表 3.1 対応のある t 検定の結果及び知識得点と受容感得点の変化量について

変数	事前 (SD)	事後 (SD)	対応のある t 検定の結果
知識得点	10.289 (3.902)	13.876 (3.988)	$t(96)=-8.717$, $p=.000$, $d=-0.911$
受容感得点	70.031 (8.263)	71.635 (7.898)	$t(95)=-3.205$, $p<.01$, $d=-0.199$

IV 考察

1 性的マイノリティに関する知識の変化

本研究では、性的マイノリティに関する授業を受けることで、受講者の性的マイノリティに関する知識量は増えるという仮説を立てた。事前知識得点と事後知識得点の間に有意な差がみられ、その効果量の大きさから授業の効果は大きいと考えられる。この結果から、性の多様性に関する授業を受けることで、教員養成課程の学生の性的マイノリティに関する知識量は増えるという仮説は指示された。授業実践による性的マイノリティに関する知識量の増加は、橋弥ら(2016)でも報告されていたが、本研究では性的マイノリティに関する正誤問題の正答率や問題への正誤をもとにして算出した知識得点の変化から、より客観的に授業を行うことによる知識量の増加を示すことができたと考えられる。

2 性的マイノリティに関する知識と知識に対する自信の関連とその変化

事前調査において性的マイノリティに関する正誤問題の解答と正答確信度の間に負の相関がみられたことから、誤った知識を持っている人ほど自分の知識に自信があることが示唆された。誤った知識であるにも関わらず、その知識が正しいと自信をもっていることは様々な危険性がある。当事者との関わりや対応が適切にできず当事者を傷つけてしまったり、誤った知識を周りに広めて

しまったりすることもあるだろう。このようなありがちな誤解を正すためにも、授業や講演会を通して正しい知識を伝えていく必要性がある。

事後調査において性的マイノリティに関する正誤問題の正誤と正答確信度の関連について「からだの性とこころの性が一致しない人は全員、性別適合手術を希望している」という問題以外に負の相関を示す問題はなかったことから、性的マイノリティに関する授業を受けることによって、誤った知識をもっているにも関わらず自分の知識に自信もっている人は減少したと考えられる。しかし、からだの性とこころの性が一致しない人たち(トランスジェンダー)と性同一性障害を混同したままの学生が多いことが考えられ、誤った知識に自信をもっていることが示唆された。

3 性的マイノリティに対する受容感の変化

本研究では性的マイノリティに関する授業を受けることで、受講生の性的マイノリティに対する受容感が高まるという仮説を立てた。事前同性愛者受容感尺度得点と事後同性愛者受容感尺度得点の間に有意な差がみられたが、効果量が小さかったことから授業による効果は小さいと考えられる。この結果から、性の多様性に関する授業を受けることで、教員養成課程の学生の性的マイノリティに対する受容感が高まるという仮説は指示されたが、その効果については検討の余地がある。佐々木・大守(2020)は、「知識を教える講義の効果は限定的であると推測される。大勢で「講義」として聞く「一般的事実」は、「理解できるが自分からは遠い話」として捉えられがちである」と知識伝達型講義の限界について述べている。このことから一方的な知識伝達型の講義ではなく当事者による語りを聴いたり、当事者と交流をするなど授業の内容や構成の仕方に工夫を行い、受容的な態度を形成するための適切なアプローチを考えていく必要がある。

4 総合的な考察と本研究の限界

本研究の結果、100分という比較的短時間の授業実践であっても、教員を目指す学生の性的マイノリティに関する知識量が増加し、自身の知識に対する自信が正しく向上することを明らかにすることができた。また、本研究ではとくに性的マイノリティに対して関心をもっている学生を対象としているわけではない。このことから、もともと性的マイノリティに対する関心がとくに高い場合でなくても、授業を受けることにより、性的マイノリティに関する知識量が増加し、自身の知識に対する自信が向上すると考えられる。今後は、短時間であっても性的マイノリティ当事者への受容感を高めるような授業開発について検討を行っていく必要がある。

本研究の限界として、対照群をおいていなかったことがあげられる。授業前後の変化は検討することができたが、授業を行っていない対照群との比較を行うことはできなかった。対照群との比較ができれば授業の効果をより明確にすることができると思う。

参考・引用文献

- 橋弥あかね・平井美幸・梶村郁子(2016)．セクシュアリティ講義における養護教諭養成課程学生の感想文の分析 大阪教育大学紀要 第IV部門, **65(1)**, 115-121.
- 日高庸晴(2015)．教員 5,979 人の LGBT 意識調査レポート
<http://www.health-issue.jp/kyointyousa201511.pdf> (2021 年 1 月 19 日閲覧)
- 井出智博・松尾由希子・鎌塚優子・山元 薫・玉井紀子・細川知子(2018)．公立高等学校における性的マイノリティ生徒への対応の現状と課題ー静岡県の養護教諭への調査を通してー 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇), **68**, 71~88.
- 三上 純・井谷恵子(2018)．教員養成課程の学生における性的マイノリティに関する知識と意識についての研究 スポーツとジェンダー研究, **16**, 36-47.
- 宮澤 仁・福富 護(2008)．同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連 東京学芸大学紀要総合教育科学系, **59**, 211-221.
- 佐々木直美 (2016)．大学生および成人を対象とした男性同性愛者に対する意識について-当事者による講演会の参加前後の比較から- 山口県立大学学術情報看護栄養学部紀要, **9**, 33-40.
- 佐々木 新・大守伊織(2020)．学校職員や心理職になり得る大学生の性的マイノリティへの態度に及ぼす講義の効果 GID(性同一性障害)学会雑誌, **12**, 41-49.
- 清水裕士(2016)．フリーの統計分析ソフト HAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.
- 白石崇人(2016)．教員養成における教育史教育 広島文教女子大学高等教育研究, **2**, 29-48
- Taylor, A. K., Condry, H., & Cahill, D. (2017). Implementation of teaching on LGBT health care. *The Clinical Teacher*, **14**, 1-4.
- 戸塚唯氏(2018)．性的マイノリティの児童生徒への支援と支援への態度変容を導く要因 千葉科学大学紀要, **11**, 47-56.
- 和田実(1996)．青年の同性愛に対する態度：性および性役割同一性による差異 社会心理学研究, **12(1)**, 9-19.
- 薬師実芳・笹原千奈未・古堂達也・小川奈津己(2014)．LGBT って何だろう？ーからだの性・こころの性・好きになる性 合同出版
- 吉岡真梨子・坂谷佳祐(2017)．教員養成課程学生の性的マイノリティに関する知識量及び正答確信度を規定する要因の検討 学習開発学研究, **10**, 157-164

The Effects of Taking a Class on Knowledge about Sexual and Gender Minorities and Homophobia

NODA Yukina*1, YAMADA Tsuyoshi*2, OHMORI Iori*3

The purpose of this study is to clarify the effects of taking a class on knowledge about sexual and gender minorities, confidence in one's own knowledge, and levels of homophobia. We measured the amount of knowledge students had about sexual and gender minorities, students' confidence in answering the questionnaires correctly, and their levels of homophobia. The results showed that taking a class about sexual and gender minorities significantly increased the amount of knowledge students had about sexual and gender minorities and decreased their homophobia. However, the effect size in the level of homophobia was very small. As for the students' confidence of their correct answers, before the class, those who had incorrect knowledge about sexual and gender minorities were more confident in their knowledge, but after the class, those who had correct knowledge were more confident in their knowledge, a positive correlation. Based on these results, it is necessary to find an effective way to decrease homophobia.

Keywords: sexual and gender minority, diversity of sexuality, education

*1 Student at the Graduate School of Education, Okayama University

*2 Graduate School of Urban Social and Cultural Studies, Yokohama City University

*3 Graduate School of Education, Okayama University
